

先哲叢談聚議 梁田蛻巖：その十

雅俗の会

<https://doi.org/10.15017/4741991>

出版情報：雅俗. 10, pp.215-220, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



先哲叢談聚議

——梁田蛻巖——

《連載 その十》

雅俗の会

■梁田蛻巖（卷六）

梁田邦美、本名邦彦、字景鸞、小字才右衛門、號蛻巖、武藏人、仕赤石侯。

梁田邦美：仕赤石侯 梁田象水撰「顯考赤石教授蛻巖

府君行述」（『蛻巖集』）前編八卷後編八卷十六冊。寛保

二年（安永九年刊）後編附録、「史氏備考」卷九など。

以下「行述」と略す。）に「府君字、景鸞。諱、邦美。初、

諱、邦彦。産、于武州。…因、テ自號「蛻巖」。藤姓、梁田氏、

とある。また、「梁田先生蛻翁邦美墓碣」（黒田義隆編

『梁田蛻巖全集』）平成八年刊）所収「象水集」に拠る。

以下、「墓碣」と略す）に「顯考名邦美。字景鸞。號、

蛻巖。又號「竊齋」。藤姓、梁田氏。初稱「才右衛門」。

後請「老改「蛻翁」。…生、于江戸神田、享保四年、^{己亥}夏。

為「赤石教授」。寛文十二年正月二十四日生、宝暦七年

七月十七日没、八十六歳（「墓碣」）。墓所は兵庫県明石

市本立寺。

蛻巖生而穎悟、幼學、入見鶴山、漸長、才識高遠、尤、王、詩、

才既絶倫、而鑽研至老、不止、年二十六、介、鶴山、見、白、

石、白石不妄容人、獨異蛻巖之才、與之交、脫、脫、見、中、

底、江、郭、北海曰讀蛻巖之集、譬猶上崑崙之邱、步步

是玉、入、摘、檀之林、枝、枝、是香、詩、至於此、宜、無、遺、論、而、

猶有、未、盡、善、者、何、也、蛻巖用才、太過耳、張、茂、先、謂、陸、

士衡曰、人常恨才少、而子更患其多、余於蛻翁復云、

蛻巖生…人見鶴山 人見鶴山は人見竹洞。幕府儒官。

寛永十四年十二月八日生、元禄九年正月十四日没、六十歳。蛻巖が竹洞の門人となったことは「行述」「墓碣」「梁田邦美自叙傳」「梁田蛻巖全集」所収、以下「自叙伝」などで確認できるが、入門した年齢に関しては「十一歳」（「行述」）、「十二」（「墓碣」「自叙伝」）の二説に分かれる。

年二十六 蛻巖二十六歳は、元禄十年。

介鶴山見白石 白石は新井白石。幕府儒官。明暦三年二月十日生、享保十年五月十九日没、六十九歳。「行述」に「府君年廿六。因「田伯隣」、始「謁」公」とあり、師鶴山の紹介により白石に謁したとする本文と齟齬する。鶴山は、元禄九年正月十四日に没しているので、鶴山即ち竹洞を介して白石に面謁したというのは念齋の誤記。白石の高弟である田伯隣の仲立ちにより白石に見える機会を得たとする「行述」の記述によって訂正すべきである。田伯隣は、益田鶴楼。漢詩人・薬商。生没年未詳（補註）。白石不妄容人 「行述」に「公（田邊註：白石のこと）性簡重。高持「風裁」。不「妄」容接」とある。

獨異蛻巖之才…見中底 「行述」に「公見而奇「其文」、

延「齒」門客一、懇款備「至」。乃每「為」詩「為」文、輒就而質「焉」。白石編「停雲集」（享保三年序、二卷二冊）には、木下順庵門下の作を中心に二四名の作品二六〇首を収めており、そのうち一三首が蛻巖の作。同書中、蛻巖に註して「景鸞少「シテ」以「材」聞「ユ」。歷「事」列国「一」宦游不「遂」。在「窮阨」文章「甚富」という。

江邨北海曰…復云 江邨北海は儒者。正徳三年十月八日生、天明八年二月二日没、七十六歳。北海とその弟清田儋叟は、明石において蛻巖と忘年の交をもった。この箇所、北海著『日本詩史』（明和八年刊、五卷三冊）巻四より引用。張茂先は帳華。西晋の名将・学者。陸士衡は陸機。晋の詩人。へ本文異同、讀蛻巖之集——今讀其集。蛻巖用才——蛻岩用才。

蛻巖既爲伊洛學、又信此邦神道、又博讀釋典、恒言云、
宣聖之學、東方之道、花毒之教、鼎足不相恃、

蛻巖既…復信此邦神道 伊洛学は朱子学、即ち朱子学

を奉ずる竹洞に師事したことをいう。また神道を信奉した
ことについては、「行述」に「初^メ在^ニ都下^一、從^ニ横山當
永氏^一學^ニ神道^一。後入^ニ吉川家之門^一、聞^ニ惟足氏之說^一、
講^ニ習日本紀中臣祓等^一。又讀^ニ山崎垂加翁所^レ神書^一、頗
左^ニ袒^ス其說^一とある。

博讀釋典「行述」に「壯歲參^ニ勝林^一、中華和尚^一。閱^ニ
圓悟大慧等^一諸錄^一とある。

宣聖之學…不相悖 「行述」に見える。〈本文異同〉鼎
足不相悖——蓋相為鼎足、而不相悖。

少時專談武說兵其評古之勇將戰士也論議慷慨有
烈丈夫風言或及周瑜赤壁謝玄淝水織田信長捕
狄間上杉謙信川中島等事則抗腕按劍躍如色飛
當世名爲霸儒年四十八事赤石侯先是與世祖歸
游仕屢不遂家唯壁立其詠雪詩序云余頻年窮甚
書篋中除四子外有詩韻一冊徐文長集半部又嘗
作不能負書詩有惠車郭舉滿天地誰信空拳猶窶
園之句

少時專談武說兵…烈丈夫 この条「爲霸儒」まで、「行
述」より抄書。また「梁田氏家譜序」(『蛻巖集』後編卷五)
に「元禄初、美未^レ仕在^ニ江東^一。慷慨尚^ヒ氣節^一、見^ニ倭
媚^一人^ヲ輒欲^レ嘔^ト。磊落^ノ人^ニハ而^ニ一面定^ム交^一。又喜^デ與^ニ
劍客兵家諸豪傑^一游^ヒ」とある。蛻巖が議論を交わし
た相手として「行述」には、例えば兵家では高田閑甫・
本多鼠生・高松正春、劍客では真里谷某・伊庭是水・竹
光柳風軒、馭師では斎藤定易・根岸某といった人物が挙
げられる。

言或…川中島等事 このほか、「行述」では、「織田信
長桶狭間」の後に「信玄氏^一戸石」が挙がる。

年四十八 蛻巖四十八歳は、享保四年。

事赤石侯 赤石侯は播磨明石藩主松平直常。「行述」
には「享保己亥^一夏、筮^ニ仕^ス赤石^一」とあり、「自叙伝」
には「享保四年己亥夏、爲^ニ我先君要体公^一所辟^一、以^ニ
月支二十口^一之^キ赤石^一教^ニ授^ス邑^一人士^一」とある。

先是…壁立 『日本詩史』巻四に「少時負^レ才^一、不^レ
閑^ニ小節^一。故^ニ筮仕數跌^ス。屢遇^ニ困阨^一、家徒四壁」と
ある。また、この条に続いて引かれる二詩も、その掲載

順序が前後してはいるが、ともに『日本詩史』巻四に収められている。蛻巖の仕官については、『自叙伝』に詳しい。

元禄元年、蛻巖父勝秀の主君である蒔田定行は、勝秀への俸禄の代わりとして、蛻巖を加賀侯の儒官に推すことにした。そこで、加賀藩留守居役津田某と会し、

約した蛻巖の雇用条件は、月俸百口あるいは三百石を賜わるといふもので、これは加賀藩家老多賀信濃に通達された。元禄四年正月、定行が死去、同七月蛻巖は加賀侯に初めて拝謁する。さらに同年十一月には父勝秀も死去した。そして翌々年、漸く仕官が叶うはこびとなったが、

その俸禄は月俸十口及び年毎の学資金三十両と、先の約束とは大いに違うものであった。蛻巖は、初めの拝謁から二年もの間放置され、大変な負債を抱えていたため、

加賀藩を致仕し、兄穀齋と同様、舌耕にて生活を立てるようになった。元禄十年、加納藩の世子戸田光熙の儒師として月俸三十口で迎えられた。蛻巖二十六歳のことである。十年間仕えたが、宝永三年、病を理由に致仕。享保四年に明石侯から召されるまでの間に、四度も火災にあい、さらに妻帯（正徳二年）、長男も生まれ（同三年）、

その困窮ぶりはいよいよ激しくなっていた。

其詠…徐文長集半部「詠雪^{并序}」は『蛻巖集』前編卷三所収。正徳三年十一月二十九日の作。『徐文長集』は明の徐渭の詩文集。三十卷。へ本文異同へ徐文長集——文長集

又嘗…猶突圍之句「不能買書」は『蛻巖集』前編卷三所収。『蛻巖集』では、詩題の下の小字註に「正徳中在東都作」とあり、蛻巖が加納藩を離れた後の最も貧しい時期の作と知られる。へ本文異同へなし

嘗小集賦詩有一人以石見國如硯求對苦思皆未得
蛻巖忽朗吟曰竹生鳥似笙四座驚歎

嘗小集…四座驚歎『梁田蛻巖全集』附録Ⅲ 梁田蛻巖研究「逸事」に「其才俊敏」、「一日友を會して詩を賦せり。時に或人石見國如硯の對句を求む。衆苦思すれども未だ得ること能はず。蛻巖徐に答へて曰く、竹生鳥似笙と。一座嘆稱せり（明石志）」とある。なお『日本儒林談』（天理図書館蔵）では、この条に「口碑」との

書き入れがある。

蛻巖以詩集厭一時、而意見屢改、格調數變、皆足以驚
人。自言初學宋、歐蘇、而後效翁、蘭齋、中年學唐、祖
李杜、錄師以錢劉諸家、又退學明、甘爲王李、銀鹿止
義爲素中郎、爲徐文長、而遂以初盛唐爲標準、弇州
濟南爲門戶、復鳴歸德書云、一旦大夢覺、宿醒解、乃
斷然以開天爲關、七子爲引、陽春白雪、奏彌高、斗
文紫氣、每望彌昌、李子來敝、猶可改、呂皮刀鈍、尚可
磨、寧爲王李、取履不敢辭、遂使兩血之驚、爪化爲食、
堪之柔吻也。

蛻巖以詩…爲門戶

「與湖玄岱」（前編卷六）に「僕

詩屢変ス、毎ニ変スル欲ス驚サント人ヲ。遂ニ爲リ袁中郎ト、又

湖爲ニ徐文長ト…近歲忽悟リ其非ヲ断然トシテ、以ニ初盛唐ト

爲ニ標準ト、弇州濟南ヲ爲ニ門戶ト」と、「歐蘇」即ち宋の

歐陽脩、蘇東坡から「弇州濟南」即ち明の王世貞、李攀

龍に至るまで、自らの好尚の變化を述べた条りがある。

また『日本詩史』卷四にも「余按スルニ蛻岩詩體屢変ス。

爲レ唐ト、爲ニ宋元ト、爲ニ初明ト、爲ニ七子ト、爲ニ徐文長ト、
爲ニ袁中郎ト、爲ニ鐘譚ト」とある。他にも詩風の變化に
ついては後出「復鳴鳳卿」の引用箇所直前でも同様の
ことが記されている。

復鳴歸德書 『蛻巖集』後編卷之七所収「復鳴鳳卿」

のこと。鳴歸德は成島錦江。儒者。名信遍、後に鳳卿。

字歸德。元禄二年一月十五日生、宝暦十年九月十九日没、

七十二歳。

一旦…柔吻也 〈本文異同〉一旦大夢覺。宿醒解乃断

然以開天爲関。——及一旦大夢覺宿醒解。乃知爲風雅中

一罪人。且悔且愧。断以開天爲関。

〈参考文献〉『蛻巖梁田邦美』（一九六五年刊、兵庫県教

育委員会会）

徳田武注『江戸詩人選集 第二卷 梁田蛻

巖・秋山玉山』（一九九二年刊・岩波書店）

徳田武著『江戸詩人伝』（一九八六年刊・

ぺりかん社）

黒田義隆編『梁田蛻巖全集』（平成八年刊・

野口泰信

【補注】高橋昌彦「高野蘭亭伝攷（上）」（『語文研究』六十号、一九八五年）によれば、鶴楼の没年を元文二年と推定。また、成島錦江「鶴楼伝」（『事実文編』雑編六）に、享年六十五歳とある。

（田邊菜穂子）